

8 異常海況現象とその相関的カラクリ

宇田道隆（東京水産大学）

異常低温は昨年11月下旬からはじまり2.3月が一番ひどくなり、その後次第に弱まっている。全国の傾向をみると、北海道、東北地方の一部を除いて影響を受け、薩南、奄美群島から台湾近海にまでおよんでいる。この冬は特に季節風が強く吹いてその寒冷なジェット気流が大陸の方から能登以西、東シナ海にわたる水域から黒潮流域まで冷却し、特に湧昇も手つだつて縁辺の水、対流混合の強い岸近か浅海の水を極度に冷却して、黒潮を沖に追いやり、さらに低温域をひろげる結果になり、寒風と冷氣、風浪、湧昇が重要な因子としてはたらいだ。雪どけ水流入の影響も山陰方面などにみられた。このほか親潮寒流の南下突つこみが銚子沖で例年より強く、黒潮前線が南退し、一方対馬海峡への対馬暖流の流入も本冬は異常に少なかったことなど、諸要因が重なってめずらしい異常冷水奇現象を現出した。今までの記録を調べてみると、低温年は太陽黒点の極小年に関連している。今年から来年にかけてがちょうどこの極小年に当るので、この関係で太陽活動の変化が、ヴァンアルン帯、オーロス デリンジャー現象、磁気嵐、大気超高層の温度変化、気圧変化高、中、下層の気圧変化、風系変化、海流変化および水温変化等々とながつてきている。従つて昨年からちょうど極小年期に入ると共に高層気流、気圧配置も変動し異常低温を招くような型になった。（図略）今年のような異変時にこそ天文、気象、海況、漁況の変化の相関メカニズムを解明するカギが得られよう。従つて来年もまた冷たい年になる可能性が強く、3~4年尾をひくことも従来の例から考えられる。なお、異常冷水の余恵として海水が深層水、表層水と対流混合、湧昇、貫入移流などの機構を通じて上下よく混合することになるので、低温の現象回復ののちは適当な日射量の加わることにより、海は栄え、栄養塩で肥沃化されるので漁業は今夏有利に展開されるであろう。イワシ、サバ、カツオ、マグロなど水産資源の転換期、交代期に入るものが次々現れるので注目、監視すべきであり、特に卵、稚仔、幼魚の動向が大切である。またこのような低温、高温の環境に応じて海中のバクテリア、ウイルスも海中で重要なはたらきをするものと思われる。連続した機械化された観測調査の充実が一番重要な予算のもとになる。